

東西冷戦の始まりは、第二次世界大戦終了の時であったとする説、トルーマン大統領による1947年の議会での共産党封じ込め政策の宣言からだとする説、1948年から49年にかけてのソビエト連邦によるベルリン封鎖に対抗するベルリン大空輸の時からだとする説等、アメリカ合衆国を中心とした西側諸国と当時のソビエト連邦を中心とした東側諸国との間に起きた多くの歴史上の出来事を歴史家は提唱しますが確たる定説はありません。

朝鮮戦争も冷戦の一部として扱われるべきなのでしょうが、横田の歴史として検証する時、朝鮮戦争は独立した出来事として分析するべきでしょう。1989年のベルリンの壁崩壊により、冷戦の時代はある意味終了しました。しかし横田にとっては、ベトナム戦争こそ冷たい戦争の終了、または少なくとも休止となるほどの出来事でした。



1954年10月22日。出撃に備える第35戦闘迎撃航空団のF-86Dセイバー。

従って、この章では朝鮮戦争中の1952年からベトナム戦争が激化した1964年までの13年間を横田基地にとっての冷戦の時代と位置づけて話を進めます。

この時代、横田基地を中心にしたミッションと航空機の種類は絶え間なく変化し、1950年代から60年代の半ばに横田に配属された兵隊は常に通常兵器や核兵器による攻撃の脅威を感じていました。それと言うのも、日本は地理的にソビエト連邦(現在のロシア)、1949年に誕生した中華人民共和国(中共)、1950年に韓国を侵略した北朝鮮など、敵対する国々に包囲される形となっていたからです。そのため、米空軍は日本の航空自衛隊が自立する前の1950年代から60年代初頭まで、多種のジェット戦闘機と早期警戒システムを用いて日本の防空を担うことになったのです。

前章で述べたように、第35戦闘迎撃航空団は朝鮮戦争勃発の約3ヶ月前に横田で発足しましたが、すぐにB-29重爆撃機部隊と交代しました。朝鮮戦争休戦後も1年以上、B-29の部隊は横田に留まりましたが、1954年8月、第35戦闘迎撃航空団所属の3飛行隊が再び横田へ帰還し、基地の任務が爆撃から防空へと大きく変わりました。その3飛行隊はF-86Dセイバー全天候戦闘機を装備し、北は北海道



1960年頃の第40戦闘迎撃飛行隊「レッド・デビルズ」のエンブレム。

から西は九州まで展開する米軍基地で構成された防空網の文字通り一翼を担ったのです。同航空団は1957年10月にその任務を解かれるまで横田で活動を続けました。

防空任務はその後縮小されながらも、第40戦闘迎撃飛行隊「レッド・デビルズ」に引き継がれました。同部隊は1960年にF-102デルタダガー超音速ジェット戦闘機に機種改変し、航空自衛隊に防空任務が完全に移管されるまで横田基地を中心に展開していました。

F-102のホームベースとしての横田での興味深いエピソードは、1961年4月に東宝の撮影チームが怪獣映画「モスラ」製作のために横田基地を訪れ、F-102ジェット戦闘機を映画に登場させるべく撮影したことです。結局本編ではF-86Fを中心とする自衛隊機しか見られませんでした。当初のシナリオではモスラが東京を襲った時、F-102が総力を挙げて迎え撃つ役目を演じるようになっていたようです。



F-102の出動ふりを撮影するスタッフたち

1961年4月、東宝映画「モスラ」製作のため横田基地でF-102デルタダガーを撮影する東宝映画社のスタッフ。本映画では結局F-102は登場せず、米軍機はB-57が数秒だけ登場した。この記事は横田基地広報誌日本語版「アフターバーナー」(現:フジフライヤー)に掲載されたもの。

防空任務は冷戦時代の横田の活動の一端にしか過ぎず、1954年には戦闘機部隊と共に第6007混成偵察部隊が横田に展開しました。同部隊はRB-57Aキャンベラ偵察機を用い、ソ連と中共の空域で高度な機密作戦に従事しました。この任務は57年に第67戦術偵察飛行隊などに引き継がれ60年代まで続きました。その活動については書籍「Asia from Above」(空から見たアジア)に詳細が描かれています。

冷戦の時代を語る時、最もアメリカで象徴的であったのが戦略航空軍団の存在でした。B-50、B-36、B-47、B-52などの主力戦略爆撃機の配備を担当する同航空軍団の第3航空師団第1分遣隊が1950年代半ばに配置されたことは横田基地にとって最も重要な出来事だったでしょう。

同じ頃、横田基地の滑走路を2,400メートルから3,300メートルに延長する工事が行われ、これにより当時最新・最大級のKC-



1958年4月。国道16号(旧日光街道)の開通を祝うリボンカット式典。

135空中給油機、B-47、B-52等の爆撃機、そして60年代以降に飛来するようになったC-141、C-5などの大型輸送機の離着陸が可能になりました。この工事で、基地の北側では国道16号線、国鉄八高線が滑走路の北側へ移され、南側では五日市街道が拝島方向へ大きく迂回する措置がとられました。国道16号線の原型となった道はかつて日光街道と呼ばれ、江戸時代に八王子と日光を結ぶ街道として作られましたが、旧日本陸軍が横田基地の前身の多摩飛行場を建設する時にも移動され、これが二度目の移動となりました。

横田基地には、戦略航空軍団の爆撃機の部隊ばかりでなく、空中給油機、気象観測機の部隊も駐留していました。気象観測航空隊は1950年代初期から60年代にかけてWB-29、WB-50などを用い、西太平洋の台風観測を行いました。この部隊にはのちにWC-130、WB-47、さらにWC-135なども加わりました。これらの気象観測機は、ソビエトや中共が核実験をした時のデータを収集すべく上空の塵のサンプルを採取する、より軍事的に微妙でかつ重要な飛行任務に就いていたのです。そしてこの任務こそが紛う方なき冷戦時代の彼らに託された本来の任務だったのです。現在横田基地で輸送任務にあっているC-130ですが、1961年4月に横田に初めて姿を現わした時、輸送部隊ではなく第6091戦略偵察部隊所属であったのも興味深い事実です。

1950年代から60年代半ばにかけての横田基地での生活は、どこの米軍基地でも同じでしたが、冷戦の影が色濃く覆っていました。

例えば1952年4月には、在日米軍のアーネスト・ホール博士による“Big Lie”（大いなる嘘）と題する共産主義についての講演が行われ、映像に収録されたこの講演は日本語版に吹き替えられて横田で働く日本人従業員に対しても上映されました。さらに1954年の春には、核戦争に備えて放射性降下物（いわゆる「死の灰」）に対するシェルターが基地内に掘られました。その幾つかは当時の西小学校の前や八高線のフェンス沿いにありました。



1952年4月中旬。共産主義について講演が行われた横田基地映画館と入口に立てられた看板に見入る兵隊たち。

また当時、横田で軍人とその家族向けに発行されていた広報誌「アフターバーナー」は、「共産主義とあなた」とか「共産主義入門」と題した冷戦を象徴する記事を多数掲載し、他にも空軍参謀総長カーチス・ル・メイ将軍による自由主義に対する共産主義の脅威論を引用掲載し続けました。

しかし、1964年になるとベトナムでの紛争が冷戦体制の横田を巻き込み、同年8月に起こるトンキン湾事件などで横田は次なる大きな時代の波に巻き込まれていきました。もちろんベトナム戦争は冷戦の一部でしたが、横田が大きな役割を果たす独立した出来事になっていったのです。

（加筆）以上のように横田は当時の世界情勢を反映して変貌して行くが、身近な話題をひとつ紹介する。1962年、ソビエトが米フロリダ半島のすぐ南のキューバに米国の首都ワシントンをも射程圏内に収める弾道ミサイルを運び込み、東西冷戦の緊張はその極致に達した。これがいわゆる「キューバ危機」である。ケネディ大統領はキューバ周辺海域の海上封鎖に踏み切り、危機を乗り切った。そのケネディ大統領は1963年11月に凶弾に倒れ、日本国民はその悲報を、記念すべき初の日米衛星テレビ中継で知り衝撃を受けた。横田基地で働く日本人従業員はケネディ大統領を弔い、同年12月、追悼の慰霊碑を建てた(写真右)。

序幕式には、当時の司令官、自衛隊関係者、近隣市長が参列したほか、大統領のいとこにあたるジョセフ・ケネディ中尉もフィリピンから駆けつけた。この事実を知った埼玉県川口市は翌年6月、特産の鋳物で作った灯籠を寄贈。またミニチュアの灯籠はジャクリーン未亡人のもつに届けられた。当時、横田基地の軍人は毎年のように川口市内の身障者に慰問活動しており、そのお礼として横田に贈られたものだった。慰霊碑は今も基地の旧ニナサークル脇に、灯籠はエアリフト・アベニューの中央分離帯に見ることができる。2015年4月、新聞には米国オバマ大統領とキューバのカストロ国家評議会議長が握手を交わしている写真が載っている。東西冷戦只中の1962年、どちらかの陣営のどこかでボタンの掛け違いが起これば全く違った世の中になっていたかもしれない。それは調べていくほどに戦慄する。ケネディ大統領国葬の折には幼気(いたいけ)な遺児であった女の子のちに米国大使として日本に赴任したのは暗殺事件からちょうど半世紀を経た2013年のことであった。



1954年春撮影。旧横田西小学校前のシェルター。白い柵に囲まれた2つの入り口が見える。



次の記事：ベトナム紛争と横田

Yokota Air Base History